

平成27年度事業報告

1. 庶務事項

- (1) 役員に関する事項（平成27年3月31日現在）
理事12名、監事3名
評議員10名
- (2) 職員に関する事項（平成27年3月31日現在）
場長以下職員17名
参与1名
- (3) 役員会等に関する事項
- イ. 平成27年5月15日(金)14:00-15:30 本部 執行役員会
経営改善問題について
 - ロ. 平成27年6月3日(月)14:00-16:00 JN&N 事務所 執行役員会
 - 1) 6月10日開催理事会および6月26日開催評議員会の議題について
 - 2) 神津牧場の経営改善問題について
 - ハ. 平成27年6月3日(月) N&N 事務所 監事会監査
平成26年度事業報告及び収支に関する決算報告の監査
 - ニ. 平成27年6月10日 14:00-16:00 蚕糸会館 平成26年度第1回理事会
平成25年平成25年度事業報告及び収支に関する決算報告ほか
 - ホ. 平成27年6月26日 14:00-16:00 蚕糸会館 平成26年度 第1回評議員会
平成25年平成25年度事業報告及び収支に関する決算報告ほか
 - ヘ. 平成27年6月26日 16:00-16:30 蚕糸会館 執行役員会
経営改善問題について
 - ト. 平成27年11月11日 10:30-13:00 本部 執行役員会
平成27年度中間事業報告、経営改善問題ほか
 - チ. 平成27年11月18日 14:00-15:00 蚕糸会館会議室 第2回理事会
平成26年度中間事業報告ほか
 - リ. 平成28年1月18日 12:30-15:30 本部 執行役員会
製酪工場の更新についての資金調達等の計画について
 - ヌ. 平成28年2月25日 10:30-13:00 本部 執行役員会
平成28年度事業計画及び収支予算書ほか
 - ル. 平成28年3月3日 蚕糸会館 第3回理事会
平成27年度事業計画及び収支予算書ほか
 - ヲ. 平成28年3月18日 14:00-16:00 蚕糸会館 第2回評議員会
平成27年度事業計画及び収支予算書ほか
- (4) その他
- イ. 平成28年3月10日 法人検査 神津牧場
平成25年、26年度の事業及び決算について

2. 事業に関する事項

<一般経過報告>

平成26年度は荒船風穴の世界遺産登録にもかかわらず、地滑りのため通行止めとなり、客の減少を招いたが、今年度は復旧工事や道路の拡幅工事などがおこなわれて、アクセスの阻害要因も取り除かれた。また、台風等気象災害もなく順調に経過し、11月から3月までは平均気温が平年より1.5度近く上昇、暖冬で、雪も少なく、温暖化の傾向が感じられた。

春にはNHKの全国放送「昼ブラ」による中継録画放送（表紙写真参照）、8月の再編集放送、群馬テレビの紹介番組などもあって入れ込み客数もおおよそ2割程度増加した。このため、ロジの販売も前年比で約115%と増加した。

卸販売も好調で、107%の増加であった。この要因としては新規取引として、玉村農業公社の「玉村道の駅」、A-COOP関東の直売所「J A-ファーマーズ朝日町店」が加わったことが挙げられる。それぞれ5月と8月に開店し、順調に売上を伸ばしている。集客力の高いところへの卸が売上増につながっているため、新規取引の開拓に今後とも力を注ぐ必要がある。卸販売では、この他にも東京カリントへの牛乳販売が伸びている。特筆すべき販売としては途切れていた郵便局のふるさと小包を復活させ、6月～8月の期間にヨーグルトの販売を行った。この売上は約650万円に上った。また、4月から下仁田町のふるさと納税の返礼品に参加した。神津牧場の返礼品は地域特産品として高く評価され、町の納税の5割以上を牧場の製品が占め、町からも感謝された。その総計は1300万円の売上増となった。加えて、群馬銀行の株主優待商品にも採用されるなど、特産品としての価値が再認識され、神津牧場の存在意義を地元で認識してもらう機会ともなった。

行事としては例年通り神津牧場花まつり（5月17日：1800人）、神津荒船もみじ祭（10月17、18日：1000人）を開催した。また、牧場主催行事として親子牧場体験を行った。牧場体験は8月と9月に企画したが、8月は参加申込がなく、中止となった。9月19、20日は参加が多く、7家族24名となった。例年行われている群馬県畜産協会と群馬生協の親子牧場体験は8月4、5日に行われ、9家族、23名の参加となった。この他、宿泊体験としては栄光ゼミナールの体験プログラム（8月2、3日；14名+5名）を行った。神津牧場ガイドツアー（放牧地へ入って、ウシとふれあう）は106名を数え、参加者の評価は非常に高かった。乳搾り体験とバター作り体験は土曜、日曜に一般向けに行っているが、団体向けには不定期でも行っている。学校関係の体験は東京の中野区の小学校が移動教室で13校、下仁田町や佐久市などの地元の高校や小学校、子供会など延べ7団体が日帰りのバター作りや乳搾り体験に来場した。本年は夏に旅行会社クラブツーリズムのバス（延べ11台292名）をバター作りと乳搾り体験を併せた企画で受け入れた。

製酪工場の機械等の故障が頻発しており、その都度、対応に追われているが、ゴールデンウィークにクリームセパレータが故障して、バターの製造が約2ヶ月間できなくなった。このためバターの供給を停止せざるを得なかった。このように、製酪工場の老朽化問題は喫緊の課題であり、資金調達と整備内容の検討を鋭意進め、28年度完成を目指してきた。現在、この両面で、最終段階に至っている。

研修生の受入は学生9校28名、社会人2名で、延べ人数では425名であった。しかし、残念なことに夏期の受入では熱中症で3名が途中退場した。

地域との交流では上述の牧場主催の行事の他、下仁田町のねぎ祭、商業祭、南牧村農業祭、群馬県畜産フェスティバル、家畜改良センター長野支場まつり、佐久市多津衛民藝館イベントに出店し、牧場の宣伝に努めた。

農水省競争的資金「農食事業」の育種関連に農研機構他とともに共同研究者として応募、採択され、計画に従って、今年度はシカ除けの電気牧柵を設置した。この他に、東京農大、麻布大学、農研機構との共同研究を継続した。

4月に採用した職員が急遽退職したため、8月に新たに2名の職員を採用した。

＜公益事業 I：ジャージー種牛の放牧酪農経営における6次産業化モデルの構築に関わる調査・実証・研修事業＞

1) ジャージー種牛の飼養事業

(1) 草地管理及び飼料生産事業

本年は、一番草の収穫を5月21日からおこなったが、峠地区まで含めて一番草が終了したのは7月11日までかかった。二番草については7月下旬から開始し、9月中旬まで、三番草も10月上旬まで収穫したが、大畑、峠3、峠4、一町一反、桶萱5は二番草、三番草を収穫するには至らなかった。また、切通、荻の平下は三番草を収穫しなかった。収穫したロールベールの個数は722個で昨年より74個多かった。収穫したロールについて重量と乾物率を測定して乾物収量を算出したところ183tとなり、昨年の158tより多かったが、一昨年の187tとほぼ同じとなった。このため、群馬県の玉村農業公社からイネホールクロップサイレージを購入した。本年度の自給飼料の自給率は、乾物ベースで46.9%、TDNベースで42.9%となっている。二番草、三番草を収穫しなかったのは主としてシカによる食害である。食害回避のためには牧場周辺のシカの密度低下と採草地の食害回避対策が必要である。このため、環境省のシカ対策事業を牧場周辺で行うことを要請し、本年から県の事業として捕獲事業が行われた。また、直接ではないが、農水省技術会議の競争的研究資金である農食事業（ペレニアルライグラス新品種の持続性実証試験）で試験地のシカ進入防止電牧柵の設置を行った。

草地管理については、肥料の高騰を契機に化成肥料の施用を止めて、採草地については堆肥を重点的に施用した。堆肥生産は切り返しによる堆肥づくりを行い、全量を草地内に施用した。

(2) 放牧飼養技術の確立及び乳牛改良・種畜供給事業

本年度は牧草の放射能検査が自主検査となったため、県の要請を受けて、放牧開始は昨年同様の5月中旬までずれ込んでしまった。一方、秋期は補給を行いながら最終的には12月はじめまで放牧した。峠地区への放牧は、雄の育成(肥育素牛)、桶萱地区は受託牛および育成牛群、本部地区は搾乳牛群であることは例年通りであった。

成牛は、年度始め77頭で始まり、初妊牛からの繰り上がりが14頭、事故・出荷等による淘汰が20頭で、年度末には71頭を次年度へ繰り越した。

育成雌牛の払下は26頭で、雄子牛の払下はなかった。分娩は雌38頭、雄32頭、死産1頭であった。合計71頭の出生であった。

搾乳量は、4、5、6、8、10、2月と予定乳量を上回り、年間総搾乳量は393トン（昨年359トン）で、昨年の減少をほぼ回復した。搾乳牛率は平均87.5%であったが、1月、2月は目安の85%を下回った。引き続き空胎日数の改善などが必要である。搾乳牛頭数の減少にも関わらず乳量増加となったのは淘汰を進めたことと、2産、3産の牛の割合が増加したことによるものと思われる。

牛群検定の補正乳量は、5,475kg (5,022kg)で昨年度より453kg増加している。農水省の家畜改良増殖目標の6,500kgにはかなり及ばない状況であるが、放牧をしていることを考慮すれば適当な乳量であろう。個体ごとにみると、年間乳量の最高は7,199kgで、5,000kgをこえるものは24頭となった（昨年12頭）。しかし、極端に多いもの、少ないものがなく、安定した牛群となっている。乳質の推移は例年ととくに変わりなかった。

BLV（白血病）については、今年度も農研機構の白石氏および群馬県西部家畜保健衛生所と共同で媒介昆虫のアブをトラップする試みを行い、場内に25個のアブトラップを設置して種類と発生時期の把握を行った。本年度も多数のアブが捕獲された。BLV陽転は1昨年度は0頭、昨年度は1頭、本年度は4頭の陽転がみられた。対策として淘汰の前倒しが指摘されている。なお、現段階での成果は公表されている。BLVに関する取り組みは、ホームページでも公開した。

この他、昨年より「神津牧場におけるジャージー牛の遺伝的変遷に関する研究」を東京農業大学家畜育種学研究室と共同で行っており、今年度も継続した。

(3) 放牧受託（公共育成牧場）事業

育成受託牛は4月21日から例年通り受け入れたが、放牧自粛によって、5月12日まで放牧開始が遅れた。本年は長野県からの8頭、東京からの2頭で、東京からのホルスタイン1頭以外はすべてジャージー種であった。しかし、この内1頭が6月にピロプラズマ病により退牧した。残ったジャージー種8頭の入牧時の平均体重は251.1kgであった。退牧時の10月20日には304.9kgでDGは0.30kg/日で、昨年よりも高くなった。本年は残暑がなく、比較的順調に増体した。人工授精は7頭について実施し、5頭で妊娠確認が得られた。

2) 畜産物の利用・加工技術の開発事業

(1) 乳製品の利用・加工技術の開発事業

神津牧場の特徴は放牧とジャージー牛という高品質でアニマルウェルフェアに配慮した酪農とこれに基づく良質な乳製品の加工・販売までおこなうことにある。このことによって6次産業化による高付加価値を生み出している。中心的な酪製品は例年と変わらず、パック牛乳、アイスクリーム、ソフトクリーム、バター、チーズ、ヨーグルトなどで、それらの加工製造について、技術開発と製造を行っている。

今年度の加工部門の受入乳量は、392.7t（昨年359.7t、1昨年350.8t）で、牛乳としての仕向けは73.2t（昨年64.8t、1昨年62.7t）、ソフトクリームは75.1t、（昨年71.8t（1作年69.0t）、バターは127.2t（昨年81.5t、1作年58.3t）、チーズは19.2t、（昨年17.7t、1作年18.8t）、ヨーグルトは27.2t（昨年23.2t、1作年27.6t）で、残りの66.6t（昨年101.0t、1作年113.8t）は生乳として出荷した。これまで、生乳の約3分の1が出荷されていたが、この出荷分を加工に廻すことが収益向上のための方策となっていた。本年は出荷し向けは18%と大きく減少した。その分がバター生産に廻った。

本年度の特徴はバターが大幅に伸びたこと、その他の製品もそれぞれ伸びたことである。バターは品不足感も含め、ふるさと納税の返礼品などギフトとしての需要が顕著であった。チーズは土産としての需要もあり、新製品もあって、売れ行きが増加した。主力のソフトクリームについては、春、秋の好天も幸いして、順調に増加した。牛乳は東京カリントのドーナツの売れ行きが好調で、需要が増加した。一方、アイスクリームは委託製造という事情もあり、供給面で制約された。

(2) 肉用肥育・加工事業

神津牧場の潜在資源として”肉”部門の活用については本年度も継続して、進めている。

一つは、去勢牛の放牧肥育の牛肉については、放牧効果を維持した4か月仕上げで、1か月に2.5頭のペースでレストラン等に出荷を維持した。

鉄板焼きコーナーでのバター焼きも来場者にコンスタントに支持されている。この放牧牛肉の利用を拡大するために、串焼き、煮込み、挽き材（ハンバーグ）にして利用することを継続しているが、対面販売での評価は高く、一定の評価を受けている。通常販売への展開を図るため、煮込みのレトルト化を行った。この老廃牛活用のレトルト「神津牧場ジャージービーフのカレー、ハヤシ、シチュー、煮込み」の販売を行っているが、お土産用の需要は高いものと思われる。

この他、牛肉の加工品として、ハム、ソーセージ、サラミ、パストラミ、ジャッキーなどの新商品も開発して販売を行っているが、原材料に限界があるのが残念である。

(3) 放牧養豚事業

バター製造の副産物である脱脂乳の有効利用を図るため、放牧飼養の豚に給与することによる有効活用については本年度も実施した。5月と9月に子豚を導入し、3か月で100kgにして屠殺し、

ソーセージ・ハム等に加工し、場内・通販で販売した。特に、お歳暮、お中元として通販による評価が高く品薄となる。場内での対面販売でも支持されている。

（４）実習生・研修生の受入れ事業

大学生等の実習生は例年、7月から9月の夏休み期間が中心であるが、本年度は6月に2名、11月に1名、3月3名の希望者があり、合計で社会人2名、9学校29名を受け入れた。延べ人数は425名となった。うち、女子は310名、男子が115名で女子の実習生が多くなっている。

（５）副産物の払下

副産物の生乳は、牛乳として販売する他、バター、ソフトミックス、チーズ、アイスクリーム、ヨーグルトに加工し、農産物直売所、スーパー、デパート等への卸販売、牧場のロッジにおける直接販売、カタログ等による通信販売による払下を例年どおり実施した。

払下形態別の販売額のシェアを見ると、卸が77.2%（昨年79.4%、1昨年77.3%）、ロッジが16.7%（昨年14.6%、1昨年15.3%）、通信販売が6.1%（昨年6.1%、1昨年6.0%）となっており、ほぼ前年並みとなっている。卸販売への依存度が高い。

また、品目別のシェアをみると、ソフトクリームが約半分の48.0%（昨年47.2%、1昨年47.6%）を占め、ついで牛乳の20.1%（昨年20.9%、1昨年20.6%）、ヨーグルトの13.5%（昨年13.2%、1昨年15.2%）、バターの10.9%（昨年10.9%、1昨年9.3%）とつづき、アイスクリームとチーズは2.1%及び5.4%に過ぎなかった。牛乳の販売は東京カリンのジャージー牛乳ドーナツの売れ行きが好調で、販売量の低下を補完し、押し上げている。例年の如く、卸販売及びソフトクリームの販売に大きく依存している構造は変わらない。

本年度の卸部門の乳製品は震災による減少から回復してきた。（昨年比119.1%）。通信販売も、昨年比110.5%と増加している。群馬県内での秋から春に向けて開催される各種イベントやデパート等の催事には今年度も積極的に参加し、神津牧場乳製品の普及宣伝に努めた。

<公益事業 II：牧場の持つ多面的機能の発揮促進事業>

（１）牧場体験及び緑資源の高度利用

牧場での体験を通して、酪農・畜産の理解醸成を図るべく、本年度も例年と同様の様々な事業を実施した。バター作りや乳搾りなどの一般体験は、シーズンを通じて実施し、幼稚園・小中学校・高校・大学生などのほか、一般の来場者まで数多くの参加者があった。

1泊2日で、牛とのふれあいも含め、各種の体験をする企画は、本年度も「親子牧場体験」を群馬県畜産協会・ぐんま生協が主催する形と牧場が主催する形の行事として行った。群馬県畜産協会とぐんま生協の親子牧場体験は8月4、5日に行われ、9家族、23名の参加となった。牧場主催の体験は8月と9月に企画したが、8月は参加申込がなく、中止となったが、9月19、20日は参加が多く、7家族24名となった。この他、宿泊体験としては栄光ゼミナールの体験プログラム（8月2、3日；14名+5名）を行った。参加者の満足度は高く、酪農畜産に対する理解醸成に寄与するものとなった。

また、緑資源の高度利用に資するために、場内の生物多様性、特に野生動物の実態調査を本年度も継続して行った。麻布大学の塚田氏によるカメラ・ビデオの設置による出現動物の調査を継続するとともに、同大野生動物学教室の学生と大学院生の調査研究を受け入れた。また、農研機構の竹内氏によってシカの出現調査も継続され、基礎データの蓄積が進んでいる。この野生動物の調査によって得られた成果についてはホームページに順次公開しているが、これらエコツーリズムの体験として、事業化することを目指して、麻布大学の南先生の協力の下に、体験学習の中に一部を取り込んだ。また、8月には麻布大の学生を対象に、4泊5日でフィールドワークを中心としたカリキュラムが行われる中で、学生実習や自然学習の場としての牧場利用の可能

性があることが明らかとなった。そこで、これまでの牧場での体験プログラムと合わせて、牧場のガイドツアーや夜の牧場体験のプログラムを開発した。さらに、これまでのプログラムをさらにブラッシュアップしてプログラムの充実を図って行くこととした。

春の神津牧場花まつりと、秋の神津荒船もみじ祭りを例年のように開催したが、天気はよく、来場者は多数に上った。このほか、秋の収穫祭時期等には、地元の市町村等での行事にも参加し、バター作り体験や乳製品、肉製品のPRも例年通りに行った。

(2) 家畜とのふれあい及び畜産理解醸成事業

ふれあい用として、山羊、うさぎ、ポニーの飼養、展示を行い、一般来場者に喜ばれた。一昨年度から実施している山羊のお散歩は子供達に人気があり、順番待ちもあることから時間制と少額の料金を取ることにした。また、ガイドと共に放牧地へ入る「ガイドツアー」は好評で、106名の参加があった。今後、こうした試みを行いながら、プログラムの充実を図っていく。

この他、親水公園の隣接部分に設置したドッグラン（無料）は多くの愛犬家に利用されて、集客の一助となっている。

<収益事業>

来場者の回復もあって、食堂は前年比 112%、宿泊は 110%、鉄板焼は 102%は、売店も 108%と昨年の落ち込みにたいして回復傾向を示した。

宿泊はロッジの老朽化もあり、抜本的な改善が望まれているが、団体客の利用頻度を上げることや牧場体験とのタイアップによる増加が期待されている。また、最近では低価格の料金のせいもあり、ロコミによるキャンプの希望者も増えてきている。

売店では牧場の牛乳やバターを使用したもの、地域の特産品など、牧場としての特徴を打ち出せるものに限定して特色を出しているが、そうした点を客に伝える努力や販売品の開発などにさらに努力する必要がある。乳製品の多くは冷蔵、冷凍品となるが、お土産品としての扱いがむずかしい。お土産となる普通品の開発が必要である。

<参考>

外部研究機関との共同研究による成果

下記のようにホームページで逐次成果を公表している。

外部研究機関との共同研究による成果			
神津牧場では、大規模牧場の経営管理技術に関する調査研究及び実証を行うという観点から、独立行政法人の研究機関、家畜改良センター及び大学との共同研究を実施している。			
No	研究課題名(内容)	共同研究機関	備考
1	無線トラクターによる傾斜地草地の管理技術	畜産草地研究所	*
2	草地管理技術の高度化(1)草地の植生調査及び収量調査の実施と飼料成分の測定	畜産草地研究所	*
3	草地管理技術の高度化(2)アルカン法を用いた牧草採食量の測定	日本大学	
4	土壌診断とそれに基づく施肥設計	畜産草地研究所	
5	野生動物調査及び獣害回避	畜産草地研究所・中央農業総合研究センター	*
6	BLV根絶のためのアブトラップ	東北農業研究センター	*
7	ロールベールサイレージの品質改善試験	畜産草地研究所	
8	インパクトエアレーション方式と廃菌床の利用による堆肥化	畜産草地研究所	
9	山羊を使った雑草管理の実証試験	家畜改良センター	
10	ジャージー牛の乳生産に影響を及ぼす栄養要因とその制御機能の解明	日本大学	
11	放牧ジャージー牛乳の機能性成分による高付加価値化	畜産草地研究所	
12	放牧ジャージー牛肉の機能性成分と肥育期間の短縮化	九州沖縄農業研究センター	
* : 研究課題名をクリックすると研究成果(pdfファイル)を参照できる。			